

爺爺の俳句ごっこ入門（一）

河村正浩

俳句人口の減少

昭和五十年代後半、俳句は結社の時代と言われ、空前のブームを迎えた。テレビでは俳句番組が始まり、カルチャーセンターがあちこちに開設されてどこも大変な盛況ぶりであった。

しかし、平成十年頃から少子高齢化が囁かれるようになり、平成二十年頃から俳句人口の減少が始まった。今や我が山口県の俳句人口は、ピーク時の三分の一を切っている。勿論、私の主宰する俳句会も著しく減少し、六十歳未満の会員は皆無である。この原因の一つは、国の規制緩和以後の生活環境の大きな変化によるもので、何も俳句に限ったことではなく、あらゆる芸術文化団体についても言えることである。非正規の若者の増加が象徴するように、若い人の生活にゆとりがなくなり、俳句や芸術、文化に関心を持てなくなってしまったのである。

長年、俳句の裾野を拓けようとワークショップや学校での指導なども行って来たが、暖簾に腕押し、糠に釘で、裾野を拓げる効果は全くなかった。ごく稀に新人の入会があるが、七十から八十歳代である。

句集を上梓して

昭和五十八年、初めて句集を出版した。俳句関係者以外に、職場の仲間、友人達にも贈呈した。ところが数日して届いた感想と言えば、

- ・読めない漢字が多い。意味の分からない言葉や聞いたこともない季語が多い。
- ・旧仮名や文語に違和感がある。
- ・意味の分からない句が多い（切れ、切れ字に起因）。
- ・申し訳ないが途中で読むのを止めた。

というものであった。句集を出版した俳句仲間からも同様のことを耳にしている。

プレバト俳句と書店巡り

今、民放（TBS）の「プレバト俳句」が人気を博しており高い視聴率を得ているらしい。そのお蔭でよく皆さんから「今、俳句はブームですね。俳句は面白いですね」と声をかけられる。しかし、「どうですか、俳句をしてみませんか」と誘うと、必ず「見るのは面白いが、したいとは思いません」と返ってくる。どうやら視聴者は、俳句番組というよりは、娯楽番組として楽しんでいるようである。

私はコロナ禍まで数年間、山口県内のケーブルテレビで「句会へようこそ」と言う番組をもっていた。出演者は六名で、近所の小父さんや小母さんが出ているということで人気のある番組となった。「観ていますよ」とよく声をかけられたが、視聴者の反応はプレバト俳句と同様であった。

ふと、書店や図書館では、俳句関係の図書はどういう状況にあるのか気になり始めた。そこで市内の三つの書店と市立図書館へ行ってみた。

東京に本社を置くK書店は、十冊の俳句歳時記と十七冊の入門書を出版。入門書の内、七冊はテレビで人気者になった夏井さんの著書。句集は一冊もない。他の二店は数こそ少ないが、K店とほぼ同様であった。図書館には流石に幅広く豊富に収蔵されていた。しかし、現代歌人の句集はあったが、俳句集は誰もが知っている、昭和やそれ以前の著名俳人のものに限られていた。句集は読まれず売れないのだ。